
world

tanuki

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

world

【Nコード】

N2731D

【作者名】

tanuki

【あらすじ】

異世界のものごと。世界と世界には格差があります。どっちがどっちかは読んでから

はじまり

「学園長、お悩みになっていた例の件のことですが・・・」

広めの応接間で、すつとスーツを着こなしてる20代半ばほどの女性が眼鏡を人差し指で押し上げてから右手に持った黒いノートに挟まった報告書を読み上げる。

「ふゝむ・・・」

女性とは対局に、だらりと崩した姿勢で高級そうな椅子に腰掛けた老人が髭を撫でながら声を漏らした。

「『あちら』の役員からの報告書によりますと、こちらで1番、2番、3番の者たちを連れて来いといっております」

「1番、2番、3番・・・か。簡単にいうものじゃのう。じゃがこれを請けないなどといったら、たちまちこの学園も潰されてしまうじやろうし・・・」

まいったのうと今まで刻んできた皺をさらに深くしながら、老人は頭を自分の開いた膝の間に埋めた。

「学園長、問題の本人たちはどういつてるんでしょうか？」

「それなんじゃが・・・」

秘書の言葉に地面に額を当てそうになっていた老人は、また体制をもちなおす。

「3番はいいといっておるんじゃが、2番、1番がのう・・・」

「2番も？なぜ彼女まで渋っているんですか？」

「それが、自分が話せる相手は1番と3番だけだから1、3番両方が行かなければいけないそうじゃ」

「・・・」

あゝ、と思いつ出したかのように秘書は息を吐きながら自らのノートに頭を埋めた。

「・・・コホン、では1番が渋る理由は？」

秘書はしばらく顔面でノートの冷たい紙質を味わったあと、元の締

まった表情に切り替えて頭を上げた。

「なにやら・・・その・・・ま、魔法が怖いらしいんじや」

老人がいいにくそうにぼそつというと秘書は思わず噴きだした。

「魔法が・・・くっ！怖い・・・くっくくくくくく」

老人は、両肩を震わせながらまたノートに顔を埋めた秘書を見ながらため息を一つつく。

「まあ、そう笑ってやるな」

「・・・ですが・・・つつくつく！」

秘書がノートとお友達になって5分ぐらいたってから、ぐわつと秘書が頭を上げ顔を切り替えた。

「はあ、はあ、はあ・・・コホン。ですが、学園長、これはもう断るなどは出来ないことです。なぜなら、私たちの世界は・・・」

「わかっておるよ・・・」

老人は諦めた風に呟いたあと・・・さっきから机の上に広げである書類に判を押した。

はじめての世界は、思いのほか綺麗だった。

「ふう……」

ここに來て何回目のため息か……。正^{せい}は視界いっぱい広がる自然の緑を見つめながら自らの不幸を嘆く息を吐く。

「やってられんな……」

自然は好きだったし、いつも大人になったら田舎で暮らそうなどと考えてた。だが、しかし！

「こんな意味のわからん世界など一生来たくはなかった！」

話では聞いていた。ここに来るまえも再度説明された。この異世界は昔、『こちら』の世界に勝った戦勝国だ。単位が世界なのに何故『国』かというと、文字通りこちらの世界は一つの国なのだ。

想像すら仕切れないほど広大な世界。それを争うことなく、一人の王が治めている（一人といっても補佐をする人など山のようにいると思うが）。

平和な国だ。誰に毒づくことも無く心中に吐き捨てた。『こちら』いや……。今では『あちら』の世界。つまり魔法の無い世界。そこでは戦争などしょっちゅう起こっていたからだ。一番の原因はテロ。テロといっても単発で終わるものなどではない。テロ組織は一つの国ほどの規模なのだ。つまりは全員が全員危険思想。国民全員が戦士といういかれた国が存在してしまったのだ。

テロ組織の規模が大きくなり始めたとき、世界は『こちら』へ SOS を送ったが、『そちらの世界のことはこちらには関係ない』とノータッチ。自分らを助けるのは自分らしいかない。そんな簡単なことに気がついたときは、時すでに遅し。テロ組織は自分らと同等程度の力を持っていた。その手遅れに出来た学校。それが正の所属している学校だった。

『学園』

名前などは特に決めず、とりあえず戦える者を育成するために出来た遅すぎる救世主学園。頻繁に起こっていた戦争の孤児達を片っ端から入れて、昔からの武家の子ども達を学園長推薦という形で入学させ、5歳〜18歳までという長い長い本来ならばありえない過程のまさに救世主生産学園を作りだしたわけである。

ところがだ・・・、10年ほどたち、戦士（救世主）量産がうまく回り出しはじめたとき、すでに期待もしていたなかった異世界からの接触があったのである。なんと異世界の王自信がこちらの世界にやってきたのだ。

向こうの王の話によると、『そちらの世界も段々と落ち着いてきた。ここいらでもつと交流を図ろうではないか』という案だった。だが、当時の国会は驚いた。交流などとは真つ赤でたらめ！つまりはこちらの世界の戦力確認だった。異世界の王の案は『100年に1度。学園の1番、2番、3番の実力者たちをこちらに留学生として迎えたい。だが、こちらは留学生は出さない。そしてこちらの世界で起きた事故等については一切保障できない』などという馬鹿馬鹿しく下手すれば留学生全員が生け贄にもされかねないものだった。当然、国会はこれを拒否。こんなの承諾できるはずがない！異世界の王にその旨を告げると、王が豹変した。『今まで負けた国を植民地にもせずに放っておいた！それなのに・・・！』どう考えてもめっちゃくちゃのことをいい出し、いきなり魔法を使いはじめたのだ。さすが異世界全てを統べる王というべきか。空が割れるほどの雷を天より落とし、一つの街を消し去ったのだ。そして王はいった。『本当はこんなことはしたくない。だが、もしも承諾できないというのなら1日ごとに一つの街を消す』と。そして無理やり今から500年前にされた契約は留学生制度などという実に現代らしい呼び名に変わり、今でも残っているのだ。

「とりあえず・・・寮にでも向かわなきゃ・・・」

元の世界の先生の話で荷物がすでに届いている可能性もあるらしいといっていたのを思い出し、こていねいに制服のポケットに入って

いた地図を広げて目的地に足を向けた。

どこまでも先の見える道。

新しいこの世界には自然が多かった。

魔法なんてのが無かったら住みたいぐらいなんだが。などと思わず軽く漏らしてしまうほどにこの世界は美しかった。ひまわりに似た花が道を作るかのように両端に並び、先へ先へと導いてくれる。空に移る遠くの山々は元の世界の2倍ほどの大きさに山頂を見ようとすると真上を仰ぎ見るような形になった。

正が新しい世界の自然を満喫していると、茂みが揺れた。

「っ！！」

とつさに音の発信地から跳ぶと、ひょっこりとウサギが顔をだした。

「なんだ・・・うさ」

「わああああああああああっつつつつ！！！！！」

「のおわうおあああああああああ！！！」

「アッハッハッハ、俺っすよ」

大声を出しながら顔出したのは、正の一つ下。今回同じく留学生に選ばれた梶^{かじ}だった。

「いやー、やつぱこつち来て正解だったすねー。向こうだったら先輩を驚かすなんて出来なか・・・あれ先輩？」

「よくも・・・よくもこの俺を・・・この俺をびびらせやがったな・・・！！！」

「いや・・・嫌だなあ・・・冗談ですよ、冗談！この世界に来て緊張してる先輩の肩の力を抜けせるためのっ！」

「そうか・・・それはありがとう・・・お礼に一生おまえの全身から力を抜かせてやる・・・」

「ひ・・・ひえっ！・・・ってあれ、せんぱい。獲物持っていないじゃないですかあゝ」

さっきまでの怯えようはどこにいったのか。一転、元の軽い調子に戻る。

「くう・・・そうだった・・・荷物と一緒に部屋に送ったんだった・

「・・・ということはおまえもそうだろ？」

「Y E S ! しっかし、何が転送装置なんすかねえ・・・真っ裸じゃないと転送出来ないなんて・・・あ、そういえばどっすか！？俺の新制服姿！」

いいながら制服の襟元を持ちながらくるつとまわってみせる。

今二人が着ている制服はこれから二人が留学中に通う学校のものだ。白を基調とした上下のブレザー。そんな奇抜なものでもなく、そこまで地味でもないセンス。

「くるつと回るのは女のポーズだろ・・・、男がやっても気色悪いだけだ」

「へーへー、そうですかー。でも、先輩の制服・・・」

急に梶の目が壊れ物を扱うような目に変わる。

「うるっせえ！そんな目で見るな！」

梶が哀れみの目で見るのも無理はなく、梶の身長が175以上あるのに対して正は背伸びして、160あるかないかだ。つまりズボンは裾折り、上着は腕巻き、胸はダボダボである。

「先輩。牛乳飲んだほうがいいんじゃないんすか？」

「飲んでるよ！毎朝1リットル！」

「1リットル・・・飲みすぎつすよ・・・骨が硬くなりすぎて背が逆に伸びなくなりますよ？」

「てめっ！てめえが前にでかくなるためには毎朝1リットルっていったんだろ！」

「えゝ、そんなはずゝ」

そんな調子でからかい合っていると、いつの間にか比較的高い木々のより高く先に大きな建物が見えてくる。

「うおっ！あれっすか！」

「・・・多分な」

興奮する梶の問いに正は地図を見ながら答えた。

「綺麗だな・・・」

思わず息を呑むほどの神秘的な建物。高く白い建物の中心に水によ

うなものの流れるクリアな部分から泡状のモノが上へ上へと流れている。

「あれって、もしかして魔力ですかね？」

「だよ」

「え？うおおあああ！」

梶の感嘆による答えの求めていない問いに答えたのが一人。

梶を驚かした声の持ち主は薫^{かある}。黒髪、黒目の大和撫子といった感じの女性である。そして今回留学生に選ばれた一人でもある。

「薫先輩居たんですか！？」

「いた」

「もしかして正先輩は気がついてた？」

「ああ」

「うおおおい・・・いつてくださいよー！」

「おまえも俺の気持ちかわかっただろ。薫先輩グッジョブ！」

正が親指を立てると薫も頬を染めながら親指を立てた。

正が先輩といっていることから気がつくと思うが、薫は正の一つ上の先輩である。そして得意な獲物は・・・。

「正君に誉められると嬉しい」

につこり笑う太陽スマイル・・・ではなく、背中に背負っている黒髪大和撫子美女には似合わないゴツいバックである。

「二人の荷物はあそこ」

薫が指さす方向を見ると、寮の建物の玄関横にいくつかのバックが積んであった。

「なんだよ、部屋まで持ってってくんねえのかよ」

梶が不満を露わにしていると

「何が部屋までだ！さっさと寮の前から片付けろ！」

恐らく教師であろう、向こうの世界では有り得ない真っ赤なロングを手で後ろに流しながら般若の顔をした女が立っていた。

「んだと・・・てめえ？」

梶がいきなり切れながら荷物^{モノ}の黒いバックから獲物を取り出そうと

すると、正がその頭を叩いた。

「なにすんすか！」

正は梶の胸倉を掴み耳元で小声で話し出す。

「いきなり面倒起こすな、俺はこの留学の目標を『穩便に』って決めてるんだから」

「だって・・・むかつきませんか？・・・あのツラ。ありゃあ自分はいつでもナンバーワンって思ってる顔ですよ？」

梶もチラリと赤毛の女を見ながら小声で話す。

「んなもん知るかよ！ナンバーワンでもオンリーワンでもホールインワンでもいいからさっさと荷物持って俺たちの部屋行くぞ」

「・・・はい。・・・先輩」

「なんだ？」

「今のギャク微妙」

「殺すぞ？」

「すんませーん」

こうして何気に後ろから付いてきている薫も引き連れ寮の中に入って行った。

「それにしても……」

ん?

「なんで女

の子と同室じゃないんすか!」

「そりゃあ、こっちでの俺たちの扱い、寮生の目線でわかっただろ
う？」

ここに来るまでに何人かすれ違ったが、全員無視か侮蔑の視線のど
ちらかだった。

「事務員の手違いで可愛い女の子と同室！そして起こるハプニング！少し気まづくなつた２人は学校でようやく別れられると思つたら、
「え、同じクラスなの？」そして２人はいつしか互いを意識していくようになり！ついに・・・過ちが起こつてしまう・・・私、あなたのことが・・・！」「僕もさ・・・キラーン！（歯の輝く音）」
２人の距離がだんだんと縮まつていき・・・ついに・・・」

「どかーん！」

「ぶげはあつ!!」

梶の妄想がクライマックスに突入し始めたとき、正の持つ鞘に納まった刀が鞘ごと頭に打ちぬく。

「ぎゃひひひひひひてえええええええええ！」

「いつまでのふざけた妄想してんじゃねえよ。ホラ、おまえの荷物しまえ」

正がのた打ち回りエイリアンの子どものような叫び声を上げている梶は見ず、足元のバックやらダンボールやらを蹴り飛ばす。

「辞めて！中がこぼれたら大変だからっ！おかんにも見せたことないのにいいいい！！」

やけに嚴重にガムテープが貼ってあるダンボールを蹴飛ばすと急に機敏に動き、それらを自分のベットのの上に避難させた。

「ったく・・・、んじゃもう俺は寝るからな！静かにしろよ？」

「そーいや、こつちの世界は昼でも向こうは夜でしたもんね・・・
・ってあれ先輩？もう寝てる！？」

「すーっ」

梶が正の唇に約一センチのところに聞き耳を立てる。

「よっしゃああああ！もう寝やが・・・ごぼしっ！」

「静かにしろ眠れねえだろ・・・くかー・・・」

「寝てるんじゃないっすか・・・」

梶はまた鞘で叩かれた痛む頭を抑えながらとりあえず大きな声は出さないように誓った。

「んっふっふっふ。やっぱ異世界に来てナンパしないやつ何てクズなわけよ・・・でもな、君はちよつと女の子っていうか・・・メス？」

「ガLLLLLLLL！」

「っおい！クマがそんなに牙剥き出しな声出すんじゃねえよ！」

梶は目の前の２メートルほどのクマに対して少しずつ後ずさる。

こんなことなら獲物を持つてくるんだっとな〜と思うが手遅れだ。

梶自身、学園のカリキュラムで普通以上に無手の戦いは学んだがクマが相手では話は別だ。というかそもそも寮のおばさんが教えてくれた学校のへの道がアバウトすぎた。方位磁石をやるから森を北に突っ切れと。よく考えれば野生のモンスターやらを倒すために魔法を磨き上げるこの世界で森に突っ込むなど森のクマさんばっचीーいい感じだったに違いない。

死の淵にあると人間頭がよく回るなあ〜などと思い右手に持つ方位磁石の示す北を睨みつけると

「ッどわあああああああああああああ！」

急に木々がざわめきだし、梶とクマを襲い出した！

「なっ、なっ、なんやねええええええええん」

初めて魔法をお目にかかる梶を驚くのも無理はない。いきなり木々の枝が伸びクマをがんにしがらめにし始めたのだ。

「くおっ・・・くおっ・・・」

「うおおい、急にそんな可愛い声出すなよ・・・」

すでに身動きができなくなっているクマに梶が同情しはじめる。

「ちっ！グリズリーがもう一匹もっ！」

急に林の中から聞こえた声にとっさにその場を飛びのきながら、声の発生源を向く。

「だれだっ！」

「えっ人！？」

「そりや人だろ・・・」

林の中の声にちよつと傷つく梶。

「あんたみたいな馬鹿でかい人間がいるわけ・・・」

「いるよっ！」

「でも・・・」

「いいから姿をみせろっ！」

梶のまどろっこしさに思わず声を張り上げた。まあ、本来短気の彼が姿も見えないやつに優位に立たれているのが気に食わなかったのかもしれないだろう。

「あんた本当に人間よね？」

そういいながら、林の影から姿を現したのは女性だった。

はじめに見えたのは流れる髪。それももとの世界で見れるはずのない純粋な赤の毛。

そして次に彼女の火を連想させる瞳。それを見たとき梶は

「結婚してください」

「へ？」

「ウオッホン！いや・・・失礼。お名前は？」

「み、ミラスだけど・・・な、なによ!?」

急に梶がミラスの両手を包み込むように上から握る。

「僕は生まれて初めてあなたのような美しいお嬢様を見ました」

「え?」

「僕のこの胸にはいま電撃が走っています!この電撃はいつたい何なのでしよう・・・なんなのでしよう?恐らく愛でしょう!」

「えっ?えっ?えっ?」

いきなり始まった梶の口説き文句(?)にただ呆然とする少女。

「ああっ!これは運命!恐らく神はあなたと出会わせるために僕をこの世界へと送ったのですね!」

「ちよつと!あんたさつきから何いつてんのよ!」

「ああっ!怒った顔も素晴らしい!その膨れ上がった頬に愛による口付けを・・・」

そういい、一人うつとりとした表情で少女の両肩を掴み・・・

「きゃあああああああああ!」

頬にキスされる寸前で右拳が梶の顔にめりこむ。

「ふんぬばあっ!」

「なっ なっ なっ なに考えてるのよ!この変態グリズリー男っ!」

そういつてスタコラサッサと森の奥に消えていつてしまった。

「いつてええええええ・・・ちつきしよう・・・あのアマ・・・」

拒否されたとたんにこれ。まさに男の屑。

「ふわぁーあ・・・」

結構よく寝たななどと思いながら正は頭を擦る。

「あつの・・・アマ・・・」

隣のベットを見ると梶が布団から腹を出しながら頬に赤い紅葉跡をつけて寝言をいつていた。

「こいつ何かやらかしたんじゃないだろうな・・・」

はい！その通りです！

なんて答える人もいなく、とりあえず蹴っ飛ばして起こしてから洗面所に顔を洗いに行った。

「ねっみいっすよ・・・」

頭がまだ覚醒していないのか、さっきから通路の両壁に結構な音で頭をぶつけながら跳ね返るように進む梶。

「おら、しゃんとしろ。薫先輩もう来てるぞ」

頭が傾いている方向により加速をつけて押すと、壁に梶がめり込んだ。

「あれ？真っ暗？って抜けねっ！先輩！誰かが真っ暗な世界で俺の頭を必死に固定してるんすけど！！」

んな気味悪いことするやついるか馬鹿。そんなことを思うが、2割がた自分のせいかと思いなおし、少し心のなかで反省したあと薫に挨拶をした。

「え？助けないんすか！？ちよっ・・・ふん！あっ抜けた！」

「薫先輩、おはよう」

「うん、おはよう」

につこり微笑むこの太陽は上に上がってるのよりも眩しかった。

「薫先輩おはようっす！」

「おはよう」

「・・・」

「ど、どうしたの？」

薫を見ながらうんうんと頷く梶を見て、少し照れたように下に俯きながら薫が聞いた。

「いえ、やっぱり薫先輩が一番だと思ひましてね」

「おまえ、やっぱり昨日何かやったのか・・・」

能天気になつて梶を横目に見ながら正は思わず頭を抑えた。

「えっへっへっへっへ」

「はー・・・」

「・・・？」

能天気そうになつて梶と、痛そうに頭を抑える正と、事態がいまいち掴めずにクルクルと二人の顔色をうかがう薫と、一人一人の心中は違ふと思うが、全員がこれから始まる生活に何らかの感慨を抱いてゐるのは確かだつた。

「やあやあやあや！君たちが100年に一度の選ばれた者たちだね！」

明らかにその辺の少女たちとは一線を置く、成熟した魅力を持つ女性がこの世界では逆に珍しい黒髪と、その髪と同じくらい深い色の瞳で留学生達を迎えた。

「先輩、なんか俺この人から悪寒を感じるんすけど・・・」

「奇遇だな・・・俺もおまえの母親と同じ匂いを感じるんだが・・・」

「・・・」

そのまま正の顔から冷や汗が頬を伝ふ。

「やあーだな！そんなに身構えないでくれたまえよ！別に・・・とつて食うわけでもあるまいし・・・ね？」

キラリと黒い瞳が輝くのを見逃すメンバーではなかつた。

「まあ、と・り・あ・え・ず！学園長室へ行きましょう！いろいろ話す事項決まつてるしね・・・というわけで！そのグリスリーみたいな君！そうっ君だよ！はい、この後で配る教材もつてきてね

！」

まるで歌うように喋り、地面に小山が出来るほど積んである教材の束に指をさしてそのまま前に歩き出す。

「なんで俺！？先輩たち……って置いていかんといて　　！！！」

すでに前方の女性の数歩後ろを歩いている先輩がた。

「がんばれグリズリー」

「クマさんよかったですね」

「いやあああああああ！っていうか昨日クマひどい目あってたの見たんすけどおおおおおおお！」

「ウオッホン、では君たち。これからわしがこの世界の注意事項などを説明するのでよく聞くのじゃ」

「いや、なんで口調変わってるんすか……？」

「え？学園長って本来こういうしゃべり方をしなきゃダメなんじゃないの？」

キョトンとした顔でこちらを見返す先ほどの女性。

「んなわけないでしょ……」

「なーんだ」

「それよりも……さきに一つ聞きたいことがある」

そういった正の顔は殺気がこもるほどに真剣だった。

「この世界の……平均身長はいくつだ！」

「え、え？えーと……確か160ぐらいだったと思うけど。そういえば、その子すごくおっきいわねー」

「……」

目の前の女性が梶のことで話をふったにも関わらず正は俯いていた。
「……」

「えつと……？ちよつとどうしたの？」

「俺……俺……この世界に来てよかったです……」

泣いていた。

「ありがとございます……えー……えー……」

「あ、ごめんなさいね。自己紹介忘れちゃった」

そういつて女性はすつと息を少し吸ってから

「私の名は、ミロ・レ・ミファエル。一応学園長だ。・・・ところで、どうだったかね？さっきまでのキャラ！まさに天然可愛い系学園長の風味を出していなかったかい？いや、でも君がいきなり泣き出すせいで少しこっちのキャラが薄くなってしまうたね！だが天然可愛い系学園長もなかないけてなかったかい？惚れたかい？しかし残念、私たちは教師と生徒・・・あれ、学園長って教師のうちに入るんだったつけ？アツハツハツハ！」

急に口調を変え、豪快に笑いだす学園長ミファエル。その様子をみて少し予想でもしていたかのように正がため息をついたあと、質問した。

「えーと・・・、失礼ですが俺たちは名前が一つ以上ある人に対してどう呼べばいいのかわかりません・・・どこを呼べば？」

その問いにミファエルはちよつとしまったという顔をしたあと

「そう・・・だったな。うむ、特に親しくない場合は一番上、適度に親しみを込めてだと一番下。真ん中は主にその家系の血筋などを現しているのであまり呼び名で使うことは少ない。ちなみに私の場合はミファエル先生だ」

そういつてにかつと屈託のない表情でミファエルは笑った。

「本来なら次は君らの自己紹介なのだが、あとで・・・いいかな？どうも決められた話すことはさっさといつてしまわないとかなわない性質なんだ」

その言葉に3人がコクン頷く。

「コホン、では君らにはこれから注意事項をいくつか話す」

「まず一つ目！森には入らないこと！」

ピクンと梶の肩が跳ねた。

「理由は森には君たちが知らない生物が多すぎる。それに君たちはこの世界の者がなぜ魔法なんて物騒なものを習うか知っているかね？それは簡単、君らの世界にある義務教育ほどにこの世界にとって

戦うというのはありふれている。だからこそ足し算やら引き算やらを覚えるのと同じように身の守り方、敵の倒し方を知る。つまり自然こそがいつでも最大の敵になるからこそだ」

「次、二つ目！女子生徒と恋仲にならないこと！」

ビクン！

「これは当然。そもそもこれが昔の戦争の理由だ。魔力のあるものと無いものを分けた戦い。もしも女の子一人でも孕ませたら……」

黙るミアエルに梶が恐る恐るたずねる。

「馬3頭に玉と玉と竿を結ばせ八つ裂きだ」

「ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい！」

梶は両手で股間を押さえ、身動き一つしなくなってしまった。ミフ
アエルはそれを見て軽く笑ったあと説明を続ける。

「三つ！……これはなるべくなんだが。決闘は控えること！えー

決闘とは……決闘とは……えー……」

「確か双方の合意のある戦いは殺人の罪にはならないでしたっけ」
ミファエルが言いにくそう迷っていると正が変わりに答えた。

「あ、ああ……そうだ」

「で、もう終わりですか？ 注意事項とやらは」

「ああ、まあ……」

それを聞き、正は梶が持つてきた教材の紐を解き自分の学年のものを力バンに入れた。

「あつ、そういえば先生。俺らまだ留学期間とか聞いてないんすけど」

当然すぎる質問。だが何故か元の世界の誰も言ってくれなかったこと。荷物をカバンに入れていた正も振り向き、梶の質問の答えを待つ。

「
こ
ん
だ
け
っ
！」

そういつてミファエルが人差し指を立てた。

「一ヶ月。なかなか短いなあ」

梶がそういうとミファエルは首を振る。

「えっ！一週間とか！んだよ、ただの旅行じゃねえか！」
またブルブルと首を振る。

「明日帰るんっすか!？」

ブルブル。

「えーと・・・じゃあ、まさかー・・・一年とか？」
コクン。

「冗談・・・ですよね？」
ブルブル。

「ちよつと！」

さすがにこれには正も黙ってられない。

「薫先輩はどうなるんですか！」

「えーつと、こっちは昨日に始業式だったから・・・正確には薫ちゃんの卒業までってこと」

「ふえ？」

いつの間にか異世界で卒業式を挙げる破目になっている薫も驚きを隠せない。

「そんで、おまえたちもこっちの報告しだいで卒業だつて。」

「はあっ!？」

そんなの聞いたことがない！あんな特殊な学園で飛び級卒業!？突然こっちで聞かされた事実には正は眩暈がした。

「俺まだ一年なのにつ！」

梶が一年といつても、すでに結構期間は経っていた。だがこっちの学園は始まったばかりであり、もとの世界と結構ずれがあるようだ。「それにしても、おまえららのとこの学園長もなかなか勇氣あるな」。危険なこの世界を卒業試験にしちゃうなんて」

そういつてほぼ同じポーズでうなだれている梶と正の肩にポンと両手に乗せ

「まあともかく・・・一年間よろしく！」

「はあ・・・」

「はあ・・・」

「?・・・?」

当人たちを置いてきぼりにしつつ、最悪の一年がはじまりつつあった。

「ちつきしょ、ざけやがって・・・！」

1年の滞在が決まったとたん急に荒れはじめた梶。

手に持っている棒状の黒のカバンで壁がガスガスと叩いている。だが梶がこんなに荒れるのも仕方が無いことで・・・なんと梶には可愛い可愛い妹がいるのだ。それも通っているのは普通の学園の。そんな目に入れても痛くないほどの妹を元の世界に残しているのだ。勿論、こっちに出てくるときに同じ学園のそれなりの奴らに護衛を頼んだ。だけど、それでも安心できない・・・もしも護衛を頼んだやつらが可愛すぎる妹の魅力にまけ、あんなことや、そんなこと、ましてやあんな・・・！！

「いい加減にしろ！」

いい音がして梶の頭が杖で殴られた。

「本来なら貴様のような魔力の無いゴミが入れる場所じゃないんだ！黙っておとなしくしている！」

杖で殴ったのも、怒鳴っているのも初日に見た赤い髪の女だった。名はファン・ド・レミエ。そう梶がいきなり切れかけた女性はやはり先生だったのだ、それも担任。さっきからブツブツとしゃべっている梶の頭を容赦なく杖で打ちつけている。普段の梶なら美人ということも差し引いてもぶちきれそうだが・・・

「夕子・・・夕子・・・無事で居るよ・・・」

頭に痣が出来るほど強く殴られたのにまったく気にも留めない。

「ちつ・・・！気味の悪いやつだな」

ちよつと異常な梶の様子を見て、レミエはそれ以上何もしなかった。

「みんな知っていると思うが今日から留学生が入る」

普通なら騒ぎそうなものだが、教室の中の生徒は誰一人としてしゃべらなかった。

「な、なんだ!？」

急に誰かが馬鹿みたいな声で笑い出したのに対してレミエは黒板に向き合う形から声の発信源を見る。

「ゴミか・・・?どうしたゴミ?鏡でも見たか？」

そういつた瞬間、梶の異変に戸惑っていた生徒達が少し沸いた。

「いやー気がついちゃったんすよ、俺。そうか、最初からこうやれば帰れたんだ」

ウキウキと歌うように喋り、自分の手持ちのカバンから何かを取り出した。

出てきたのは1メートルほどのただの木棒。

一本。

二本。

三本。

一本目と二本目に金具が着いてる以外になんの変哲のないただの木の棒だった。

「おいおい、ゴミ。なんだきゆうに?それでお遊戯でもするのか?」
また少し教室が沸く。

だが・・・

普段の恐ろしいほどの短気な梶はそれすら気にせず、カチツ、カチツ、っと棒を繋ぎ合わせていく。そして、最後に出来たのは3メートルほど長い木の棒。

常人では持つことも出来なさそうな木の棒を梶が片手で確かめるように2、3振った。それを見てさすがに様子がおかしすぎるということに気がついたレミエは慌てて自らの杖を構えた。

「この世界のやつら皆殺しにすれば俺もこの世界に帰れんじゃ」
「ん」

狂気。まさに狂気。

梶の精神はすでに何かを超越していた。

「おい!私が許可をする。このゴミを攻撃しろ!」

どうせ契約で奴らの命の保障まではされていない。そう思いレミエ

は生徒に声をかけた。

「エー、先生まじでやつちゃっていいんす・・・」

喋っていた生徒が目の前で消えた。

一人

二人

三人

四人。

そこまで数えて慌ててレミエは自らを梶から距離をとった。

「なんだ・・・あれは・・・」

さつきまで確かに長い棒を振り回していたはずだったのに・・・今あいつが持つているのは・・・鞭？

「さくて、そろそろペース上げるぜえええええ」

木の鞭のスピードが上がる。

見えるのはただのうなりだけ。

暴風に巻き込まれるようにひしゃげた生徒たちが飛んでいく。

魔法の詠唱？出来るわけがない、止まったら身体をへし折られる。

だが、自分は教師だ。とりあえずこの事態を起こしているやつを仕留めねば！

そう思い、一歩進んだときすでに身体は10歩分ほど横に飛ばされていた。

悪夢のような状況が5分ほど続いたあと、梶が一人ですべてがなぎ倒された教室に立っていた。

そこでレミエと目が合った・・・。

「あれえ?? 初日に見た糞女じゃねえか？」

「・・・くっ」

ついさつきまでゴミ扱いをしていたやつが自分を見下している。

「このゴミめ・・・」

そういいかけて意識を手放さそうとしたとき、グシャと自らの手

の骨の碎ける音を聞いた。

「ぎゃあああああああああ」

「おいおいおいおい！何勝手な発言して気絶しようとしてんだよ？
っていう昨日もなんかむかついたしな・・・とりあえず拷問フル
コースでもやってやつか・・・あつ！右手の骨全部砕いちゃったし
！一本ずつやんなきゃ拷問じゃねえってのに・・・」

「ひい・・・ッ・・・」

「まず左手小指の第一関節」

「ぎゃあつ！」

木の棒で当然のように梶がレミエに指の骨を粉にする。

「次は」

「ひつ！」

レミエの目の前いる男が悪魔ように見えていたとき、梶の上に人物
により影がかかった。

「おい、おまえは俺の目標を忘れたのか？そうなのか？そんなんだ
な？」

「え・・・？あれ？せ、せんぱい・・・いやあゝだつてちよつと
夕子が心配だったしいー、ちよつ、ちよつゝと騒ぎを起こしちゃ
つたっていうかあゝ」

ついさつきまで魔物のような振る舞いをしていた男が怯えていた。

それも自分よりも小さく腰に一本の武器をつけた男に。

「ちよつとおゝ？ちよつとおゝなあゝ、授業中に生徒と先生ぶつと
ばしたのがちよつとおゝなあ？」

「え、えーまあ、ちよつとおゝやりすぎちゃったみたいナ・・・

逃げるが勝ち！！」

「あ、おまえ！」

梶はダッシュで2階も窓から迷わず飛び降りた。

「てめえ、帰ってきたら覚えてよおゝ！」

正が窓に近寄り、大声を出すと遠くから「すいまつせーん」という
声が聞こえてきた。

「ったく・・・」

「で、騒ぎの原因は？」

正がため息をつきながら転がるイスを蹴っ飛ばすと、いつの間にかクラスのドアの前に立っているミファエルが正に聞く。

「多分・・・妹が心配だったんじゃないんすか？」

「妹？彼にそんなのがいるのか？」

「ええ・・・あいつの両親が最近死んでからますます溺愛してるんですよ・・・」

「ふうむ・・・そうか」

「えっと・・・罪になります？」

「・・・まあ、いいだろ。そこらへんの事情を無視して急な長期滞在だったし、それに・・・死んでなけりや治せる」

学園長はにかつと笑ってみせてから、負傷している者たちをタンカで運ぶ回復要員達を指さした。

「えっと・・・俺はまだ授業いけないんすか？」

正は薫と梶とは違い、さつきからこの目の前のミファエル学園長に色々な説明を受けていたのだ。

「ああ、まだまだ。さつきのも職務の一つになるぞ。セイ先生」

「はあ、まだ学生なんだけどなあ・・・」

正は本来学生だが、少々この世界の王と面識があり、王たつての希望でこの留学で武術についてだけ先生役に選ばれた（らしい。というか本人はついさつき聞いた）。

「はあ」

「ため息をつくとも魔力が逃げるぞ」

「こっちの言葉ですか？」

「いや、いま考えた」

「は」

「コラコラ」

「えっと・・・また学園長室？」

「うむ、私のあとについてくるべし！」

「は
」
「コ
ラ
コ
ラ
」

言葉じゃないっすか!？」

「おまえ脳みそ引きずり出すぞ」

「なぜ!？」

「あー、朝っぱらからいきなり先生かよ・・・」

残念なことに今日は武術（本来なら魔法試合）の授業が一限目からである。

「梶のやつ・・・一人だけ不安が消えたからって・・・」

梶は一年の教室のところで「あ、俺もこの世界で学園長に妹のこ
と頼みましたんでもう心配ナッシングです・・・というわけで、
子猫ちゃんたち力モーーン!」といいながら自分のクラスに飛び
込んでいった。

「これも全部・・・あのおっさんの・・・」

「止まりなさい!」

「ん?」

なぜか喉元にいつの間にもやらの刃物が突きつけられている。あゝ、
この世界にも刃物があつたんだな、などと勘違いなことを考える。

「貴様はこの学園の・・・え?」

正は喉元の刃物から離れるように後ろにいる人物に倒れこみ

「まあ、正当防衛だな」

腕で相手の首を抱え、そのまま当然のようにへし折った。

「おっし、んじやお顔をはいけ〜ん・・・って人形かよ。なんだこ
れも魔法か?」

正はそういいながら、人形の胴体を蹴っ飛ばし自分の教室に足を
向けた。

人形が正に蹴られてから音を立てて床に倒れて10分ほど放置さ
れたあと、黒い影を人形を飲み込むように回収をしていた。

「起立、礼。着席」

「はい、よろしく〜」

正が教室へと向かうと、まったく面識のないやつが教壇に立っていた。そいつは金髪に金色の瞳のイケメンだった。問題があるとすれば正と背が同じぐらいなこと。

そいつは正のことを見かけると

「ふうん」

ここに来てから何度も受けてきた侮蔑の視線を浴びせた。

「あの・・・」

「はいよく聞いて！てわたしの愛しい生徒諸君」

「はい、ラメロ先生！」

ラメロの声に対してクラスの生徒が声を合わせて答える。

「実はだね、君たちにとっても残念なお話があるのさ！」

「とんでも残念な話って何ですか？」

「なんと学園長先生がこの僕を戦闘訓練から外して、ど・こ・かの魔力のないようなやつに任せようとしているんだよ」

「えー！」

「君たちはそんな、ど・こ・かの魔力のないようなやつに教わりたいかい？」

「いやです」

「じゃあ、みんなでいおう！そんなやつは帰れってね！」

「帰れっ！帰れっ！帰れっ！」

まるで打ち合わせしたかのような目の前の出来事。それを呆然と見る正を見てラメロはフンと勝ち誇った笑みを浮かべた。

「・・・えー、終わりましたか？じゃあ、学園長先生から渡された資料に沿って授業を進めまーす、まずは教科書の・・・」

「ま、ま、待ちたまえ！君い！」

「何ですか？まだ何かあるんですか？」

慌てて正に詰め寄るラメロを面倒くさそうに正は見返した。

「さ、さっきのを聞いてなかったわけではあるまい！」

「さっきの？あー、何かギャーギャー言っていましたね。実はだね、あたりから聞いてませんでした」

馬鹿じゃねえの!?

魔力もねえのに!

いかれてんじゃねえのか!?

「決闘・・・つくつく、いいけど、命をかけるってことわかってる?」

ラメロがここまで相手を嘲るのにはそれなりの自信があった。なぜならラメロは数少ない魔法剣の伝承一族であり、この学園で戦闘の指南をするほどのエキスパートである、それが魔力も無い、まだ10代のガキに負けるはずがない。

「くつくつく、いいよ、いいともさ!・・・くくくく」

笑いが堪えきれないラメロは、本来学園生活で使われることのない決闘場へと正を案内した。

決闘場といってもやけに広い広場の真ん中に二本の白線が引いてあるだけだった。

そしてその周りを埋め尽くすクラスの生徒たち。

「がんばれーっ!ラメロ先生!」

「がんばー!」

「魔力のないやつなんかには負けるな!」

「そんなやつ追い出せ!」

ラメロはその声をうつとりした表情で聞き入る。

「聞こえるかいこの声が。この声が僕に力を与える!勇気を与える!・・・さあ、はじめようか・・・。そことそこに引いてある白線のどちらかに行きたまえ」

まっすぐ並行に引いてある白線、その距離は大体10メートルほど。

「じゃあ俺はこっちで」

「そっちは僕だ!」

「・・・じゃあ、こっちで」

「フン、まあいいだろう」

「・・・」

二人が白線の後ろに立ち、足場を整えてから正が声をかけた。

「あ、そうそう、確認ですが」

「なんだい？」

「殺してもいいんですよ」

「アーハッハッハッハ、できるものならね」

二人が白線の後ろについた。

正の獲物は２メートルほどある刀。

ラメロは右手がうつすら金色の光を帯びている。

ラメロに頼まれていた生徒が開始の合図でドラを鳴らそうとしたとき……。

「ちよつとまったあああああああああ！！」

グリズリーのようにでかい男が現れた。

「んなでかくないやい！……じゃなくて、先輩！何を危ないことやってるんですか！」

「なんだ梶か……。決闘だよ」

「決闘！？相手は……」

梶は正とは反対側にいるラメロを見つける。

「そうっ！この僕さっ！君も友達なら止めてやってくれたまえ！この彼は一時の嫉妬心で命を粗末にしよう……」

「あんなの楽勝じゃないっすか！？」

「ああ……。まあそうなんだけど」

「これで勝っちゃったら先輩モテモテじゃないっすか！」

「いや……。そう……。なのか？」

「そうっすよ！そうやって一人で異世界ハーレムを作る気っすね！」

「ハーレムっておまえ……」

「そうはさせねっす！その……。えーと……。変金髪！俺と勝負だ！」

いきなりの乱入、そして自分が決闘をやっ宣言。まわりの生徒はいまいち意味がわからず、取り残されていた。

「へ、へ、へ、変金髪！？母上にいつも誉められていた一点の曇り

もないこの金髪を・・・！いいいい、いいいでだろう！君とやろう！
！そのこのへっ変グリズリーと！」

「へっ変グリズリー！？てめえ、なんかマザコン野郎じゃねえか！」
「なんだとおおゝっ！」

「おいおまえ！誰だか知らないがいい加減にしろ！ラメロ先生を侮辱するな！」

「そうだそうだ！ひっこめグリズリー！」

「グリズリー！」

「グリズリー！」

「グリズリー！」

その3秒後、いった順に消えていった。

「この俺様の長身をグリズリー？筋肉をグリズリー？てめえら骨が残ると思うんじゃねえぞおおおおおおおおおお！」

はい、梶くんブチ切れ。

「せんぱい、やつぱりこいつら全員俺がやりますうううううう」

がつくのは切れたとき。がつくのはやばいとき。

「みんなあ！？やってやろうぜ！この生意気な魔力無し野郎をぶち殺してやろうぜ！決闘だつてんならお咎めなしだ！！」

「「おおおおおおおお」」

「おい、誰か決闘の合図のドラを鳴らせ！」

クラスのリーダー的なやつが指示を出すと一人がドラのところへ

駆けていった。

そして

ゴーン！

ゴーン！

ゴーン！

開始のドラが3回鳴って、敵の生徒たちが咆哮を上げた。

「おまえ・・・本気でやるのか？」

「当たり前じゃないっすか」

答えながら右手に長い長い木の棒を持ち・・・さらに左手にも

長い長い木の棒を持った。

「本気で殺りますよぉ」

梶がニタニタしながら答えたとき、すでに付近には正はいなかった。

「ぶっ殺す」

魔法で出来たゴーレム。炎の渦。水流。氷のつぶて。雷のような一閃。風の刃。

そんなものこの嵐が消し飛ばした。

見えるのは風。当たるのは災害。

「ぎゃあああああああああああああああ！！」

当然のようにすり抜けるはずの風が身体を叩き飛ばす。

「ひいっ！だれか・ぎゃあああああああああ！」

遠くから見ると、それは一つの台風のようにだった。

「な、なんなんだよこれ」

風の渦。

「げはっ！？」

違う。

「ひいひいひいひいひい」

あれは棒の残像。

「たすけ・・・」

鞭の残像。

「ぎゃっ！びいっ！ぎゅっ！」

梶の手から先で紡がれたのは棒でもなく、鞭でもなく、風だった。

「あああああああああああああああああああ」

悲鳴が台風の中で木霊する。だが、それすらも掻き消す嵐。

「ぎゃあああああああああああああああ」

どこに飛ばされても風（棒）によってまた飛ばされまた巻き込まれ・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

声が止んだとき、まわりの風（棒）が消え、梶の姿が現れた。

残っているのは倒れた木（生徒）と、ただの水溜り（血だまり）だけだった。

「貴様！何をしたかわかっているのか！？」

ミファエル学園長が梶の前の机を叩く。

「決闘はいいんじゃないんすか？」

「ああ！決闘はな！だがあれは違う！リンチか虐殺だ！」

「だからリンチ」

「ふざけるなっ！貴様は無傷で向こうは一クラス担任丸々重症、虐殺だ！」

「殺してないんだからいいじゃないっすか」

「小僧ぶち殺すぞ？」

ぐいっとなぐり胸倉を掴む。

「先生、いくら魔法の能力が高くてもこの距離ならば殺しますよ」

その声にミファエルはぞっとして目をそらした。

ミファエルはそれなりに戦いを経験したことはある。ゴブリン退治やオーク軍の追い払い、大捕り物とした大人数でのドラゴン退治、数々の戦いをしたはずだ。こんな小僧に・・・心でいくら叱咤しても目が合わせられなかった。

これが初日にヘラヘラしていた男の目か？同一人物なのか！？

目を見ればその人がわかる。これはある程度は正しいといえることだ。だが目の前の男の瞳の中などのぞきたくなど絶対になかった。

「せんせ、もういいですか？正直少し疲れたんです」

「あ・・・ああ」

ミファエルはそのまま梶が部屋の扉を閉めるまで見送り、その後、魔法器具を使い異世界へと連絡を取った。

次の日、ミロ・レ・ミファエル学園長はその日、朝から学園長室で頭を書類に埋め悩んでいた。

あの後、異世界に連絡をとり調べたが・・・あいつが3番？あのレベルでか？

頭の中に昨日の惨劇が流れる。

「ああっ！」

思い出したものを消そうと頭を振ると書類がいくつか落ちた。だが、それでもミファエルの頭にこびりついたあのおぞましく深く黒い瞳は消えなかった・・・。

そもそも奴らの戦闘のレベルはなんだ？普通、いくらいわれたからといっても馬鹿正直に1番、2番、3番。世界の切り札ともいえるやつら生贄にされるかもしれないとこに差し出すか？

「なにか・・・なにか別の目的が・・・」

結局、その日ミファエルは学園長室に籠りきりだった。
ことが起こるまでは・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2731d/>

world

2010年10月10日19時35分発行